研究ノート

朝鮮開化派たちの日本留学と東京一致英和学校

佐　藤　飛　文

はじめに

ヘボン塾・バラ学校の後身である築地大学校と，アメリカ・オランダ改革教会が経営していた先志学校は，1883年に合併して東京一致英和学校を築地に開校した。学生数が増加したことにより，翌1884年には予科として東京英和予備校を神田に設立した。東京一致英和学校と東京英和予備校には，朝鮮人留学生も在籍していた。明治17（1884）年改正の「東京一致英和学校規則　附生徒姓名」には，朴永祐，朴聲淵（ママ），高永憲，朴準陽，李啓弼の5名の朝鮮人留学生が記載されており[1]，1885年には金益昇と朴命和が東京英和予備校で学んでいたという記事も複数確認されている[2]。これまでの明治学院史研究の成果として，李啓弼が宣教師の支援を受けて渡米し，アメリカ合衆国の大学を初めて卒業した朝鮮人だったことが明らかになっている[3]が，他の6名の留学前後の動静についてはほとんど知られてこなかった。1884年12月に朝鮮の急進開化派たちが起こした甲申政変の失敗後，朝鮮政府の命令に従って帰国した学生たちは，「釜山に到着するや否や皆捕はれて殺されたと云ふ事を其秋築地の一致英和学校で聞た[4]」と，宮地謙吉は回想している。この追憶文の内容は事実なのだろうか。

本稿の第1章から第3章では朝鮮で開化派が形成され日本へ留学生が派遣されるようになった経緯についてまとめ，第4章以降では7名の朝

鮮人留学生が東京一致英和学校・東京英和予備校へ留学後どのような人生を歩んだのか，検討したい。

1. 朝鮮開化派の形成と日本訪問

清との宗属関係のもとで鎖国政策をおこなっていた朝鮮に対し，日本は1875年に軍艦雲揚号を漢江の河口に不法侵入させて挑発行為を行い，江華島事件をひきおこした。この事件を口実に日本は朝鮮に開国を要求し，1876年に日朝修好条規（江華条約）を締結し，朝鮮を「自主の邦」として清国との宗属関係を否定し，釜山・元山・仁川を開港させた。日本の領事裁判権を認めさせ，付属文書で無関税貿易を定めた不平等条約であった。

日朝修好条規締結後，朝鮮は金綺秀を正使とする総員76名からなる第一次修信使を日本に送った。日本の官庁施設や陸軍士官学校，兵営，兵器廠，学校，造船所などの近代的施設を視察した一行は，その視察記録として『見聞事件』『日東記游』を国王・高宗に献上し，その中で，日本の近代文明の導入と富国強兵策は注目に値するということを強調した。さらに1880年にも金弘集を正使とする58名からなる第二次修信使を日本に派遣した。金弘集一行は日本政界の指導者や駐日清国外交官とも面会し，清国公使館参賛官の黄遵憲から『朝鮮策略』を贈られた。『朝鮮策略』には，ロシアの南下政策に対抗するためにアメリカ合衆国との条約を締結し，西洋の学問・技術の学習と洋式軍備の導入，産業開発によって自強を図ることを朝鮮に勧めていた(5)。金弘集は寄贈された『朝鮮策略』を高宗に献上し，日本の近代化に習って西洋近代の軍備・技術・制度を積極的に取り入れることを申し入れた。『朝鮮策略』は，開国に反対していた衛正斥邪派とよばれる保守派からは強い反発を受けたが，朝鮮政府は外交と開化政策を管掌する統理機務衙門を設置し，漢城（現

ソウル）駐在日本公使館所属の堀本礼造陸軍少尉を招聘して新式軍隊の別技軍を新設するなど開化政策を推進した。

開化政策への転換が進むなかで，西洋の科学技術や政治制度の導入を積極的に目指す「開化派」の勢力が成長した。国際情勢に詳しく，新文物の輸入と門戸開放を主張していた先覚者の一人であった朴珪寿の家には，開国前から金玉均や朴泳孝，朴泳教，徐光範，愈吉濬らの両班青年たちが集っていた。熱河副使，兵曹参判，大提学などを歴任した朴珪寿と共に何度も清に往来していた訳官の呉慶錫は，魏源が著した世界地理誌『海国図誌』や徐継畬が著した世界地理書『瀛環志略』，宣教師が創刊した西洋事情紹介誌『中西見聞録』などの開化書を持ち帰り，漢方医の劉鴻基に提供した。劉鴻基はそれらの書籍を研究し，金玉均や朴泳孝らに西洋文明に関する新知識と開化思想を鼓吹した。また，ソウル近郊の奉元寺の僧であった李東仁は，劉鴻基の影響で開化思想をもつようになり，朝鮮布教を開始した東本願寺との接触を試み，東本願寺釜山別院の住職奥村円心と親しくなった。朴珪寿，呉慶錫，劉鴻基，李東仁らの指導を受けて開化思想を育んだ金玉均，朴泳孝らは，清との従属関係を絶ち，日本の明治維新に学んで内政を改革し，自主独立国家の形成を目指す「開化派」を形成し，しだいに政権上層部に進出した[(6)]。

開化派の中心人物となった金玉均は1851年に忠清南道公州で生まれ，1872年22歳の時に科挙文科の状元（主席）となり，成均館典籍，弘文館校理，承政院副承旨，刑曹参議を歴任し，中堅官僚としての地位を固めた。

朴泳孝は1861年に京畿道水原で生まれ，13歳の時に25代朝鮮国王・哲宗の娘泳恵翁主と結婚し，錦陵尉の称号を賜った。兄の朴泳教に従い朴珪寿の門下生となり，1878年に五衛都総府の都総官に任命された。

金玉均・朴泳孝らは李東仁に資金を渡し，日本に渡って日本の近代化の進展状況を調べるよう依頼した。李東仁は奥村円心と本願寺教育課の

和田円什の助けにより1879年に日本へ密航した。李東仁はまず京都の東本願寺で日本語を学び，1880年4月には東京の東本願寺別院に寄宿しながら日本の政界人と接触し，慶應義塾の福沢諭吉とも交流を持った。1880年5月には僧の卓挺埴（無不）も金玉均らの命で来日した。開化派たちは李東仁と卓挺埴から送られた日本からの書籍を読み，世界の新しい動向を洞察し，開化思想を深化させていった。第二次修信使として金弘集の一行が東京に来て東本願寺浅草別院に滞在した際に，李東仁は金弘集と面会し，西洋諸国を範とする近代化の必要性を訴えた。

金弘集一行と共に帰国した李東仁は，金弘集の紹介で明成皇后（高宗の妃）の甥である閔泳翊と親しくなり，閔泳翊は李東仁を高宗に謁見させた。高宗の信任を得た李東仁は，統理機務衙門の参謀官となり，高宗に働きかけて「紳士遊覧団（朝士視察団）」の派遣を提案した。

1881年5月，朴定陽・魚允中・洪英植ら62名で構成される「紳士遊覧団」が日本に派遣され，日本の官庁，学校，軍隊，工場などを視察した。紳士遊覧団の魚允中は慶應義塾を訪問して福沢諭吉と会談し，留学生の受け入れを要請した。その結果，魚允中の随員であった愈吉濬と柳定秀は慶應義塾への入学が許可され，二人は福沢家に寄宿することとなった[7]。また，尹致昊は中村正直（敬宇）が創設した同人社へ入学した。彼らは日本への最初の派遣留学生となった。

紳士遊覧団の中にはキリスト者と接触した者もいた。趙秉稷の随員であった安宗洙は，農学者の津田仙から西洋農法を学び，津田がオーストリアの農学者ホイブレンクから学んだ農法を訳述した『農業三事』などを持ち帰り，帰国後『農政新論』を著し，朝鮮ではじめて西洋農法を紹介した。キリスト者であった津田仙は安宗洙に山上の垂訓の掛物を贈ろうとしたが，朝鮮が禁教下であったため安宗洙は寄贈を辞退し，「帰国の上は必ず宗教の自由を国王に誓願すべし」と語ったという[8]。

紳士遊覧団が帰国した翌月の1881年9月には，趙秉鎬を正使とする

35名の第三次修信使が派遣された。随行していた張大鏞，申福模，李銀突の3名は陸軍戸山学校への入学が許可され，軍事教育を受けた。

金玉均は徐光範とともに1882年3月に最初の訪日を果たした。長崎から神戸，大阪と移動して6月に東京に着き，外務省や陸軍部を訪問した。魚允中の紹介状を持って福沢諭吉とも面会し，朝鮮の開化について意見を交換した(9)。

一方，開化政策への転換に対し，朝鮮国内では，衛正斥邪派の両班たちから激しい反対運動が起きた。また大院君（高宗の父）の庶子李載先を王に擁立しようとする陰謀事件も発覚した。明成皇后を中心とする閔氏政権は，衛正斥邪派・大院君派を厳しく弾圧して開化政策を推進しようとした。そのような中で起きたのが壬午軍乱であった。

2. 壬午軍乱後の第四次修信使の派遣

1882年7月に起きた壬午軍乱は，旧式軍隊が起こした反乱と，それを契機とした都市暴動事件である。旧式軍隊の武衛営・壮禦営では俸給米の遅配と横領が起きており，新式軍隊の別技軍に比べての差別待遇への不満もあり，旧式軍隊兵士を中心に閔氏政権打倒のクーデターが決行され，日本公使館も焼き打ちにあった。閔氏政権は倒れ，大院君が執権の座に復帰した。大院君は統理機務衙門の廃止や別技軍の廃止，大院君派・衛正斥邪派の釈放など，反開化政策をとった。

反乱の報に接した日清両国は朝鮮に出兵した。大院君は清軍の馬建忠に拘束されて天津に拉致され，軍乱は鎮圧された。大院君政権は崩壊し閔氏政権が復活した。

壬午軍乱後，高宗は開国・開化を国是とし，キリスト教は斥けるが西洋の技術・軍備・制度を学ぶ「東道西器論」をとることを示した。1882年12月には外交を担当する統理交渉通商事務衙門（以下，「外衙門」と

略す）と，開化政策を担当する統理軍国事務衙門を設置した。日本とは済物浦条約を結び，日本は軍乱の賠償金，公使館護衛のための軍隊駐留権，兵営設置費・修理費の朝鮮側負担などの権益を獲得した。

壬午軍乱の謝罪と事後協議のため第四次修信使を日本に派遣することとなり，朴泳孝が正使に任命された。副使には金晩植が任命され，従事官として徐光範，随員柳赫魯ら7名に加え，金玉均と閔泳翊，留学生も同行し，約20名となった。一行は1882年9月13日に漢城を出発したが，日本へ向かう途中，明治丸船長ジェームズの提案で国旗を掲揚することになり，朴泳孝は船上で太極旗のデザインを考案し，国旗に制定した。10月に東京に到着して明治天皇に謁見し，国書を捧呈するとともに，日朝修好条規続約の批准書を交換し，日本公使館焼き打ちと日本人の遭難について謝罪の意を表明した礼曹判書の外務卿宛て書契を交付した。また，朴泳孝と井上馨外務卿は，済物浦条約による賠償金を5年賦から10年賦支払いに延長する協定も結んだ。日本側は一行の滞在費として5000円程度を国庫から支出し，歓待礼遇した。修信使一行は日本に約3か月滞在し，1883年1月5日に仁川に帰着した。帰国する第四次修信使には，福沢諭吉の門下生であった牛場卓造や井上角五郎，元陸軍騎兵大尉の松尾三代太郎らが同行した[10]。金玉均は帰国を遅らせ，卓挺埴や尹致昊の通訳・案内で福沢諭吉や井上馨，ヨーロッパ諸国の外交官らと面会し，1883年3月に帰国した。

朝鮮からの留学生として第四次修信使に随行した朴命和と金祐宏は慶應義塾で日本語を学び始め[11]，朴命和は尹致昊が留学していた同人社へ，金祐宏は陸軍戸山学校へ進学した。

また，第四次修信使の非公式随員であった李樹廷も農学と法学を学ぶために日本に残り，安宗洙の紹介で津田仙の農学社を訪ねた。津田から漢文新約聖書を贈られた李は，1882年12月25日に津田の案内で築地の東京第一長老教会で開かれたクリスマス祝賀礼拝に出席した。その

後，津田の紹介で安川亨牧師や東京一致神学校教授のノックス（G. W. Knox），米国聖書公会横浜駐在幹事のルーミス（Henry Loomis），東京英和学校総理のマクレイ（R. S. Maclay）らと親しくなり，李は1883年4月29日に芝露月町教会（現・日本基督教団芝教会）で安川亨牧師より洗礼を受け，日本における最初の朝鮮人プロテスタント信者となった[12]。1883年5月に開かれた第三回全国基督者信徒大会親睦会にも出席し，朝鮮語で祈祷を捧げている。5月12日に九段坂の写真館で撮影された集合写真には，前面中央に津田仙と李樹廷が座り，海老名弾正，内村鑑三，新島襄，植村正久，押川方義，井深梶之助ら当時の日本のキリスト教指導者たちとともに写真に収まっている。李樹廷は1883年8月からは東京外国語学校の朝鮮語教師として日本に滞在した。朝鮮人留学生を中心に朝鮮人教会を開設し，聖書の朝鮮語訳もおこない，ルーミスとノックスの援助により「新約馬可伝福音書諺解」も出版した。

3. 開化派による留学生派遣の本格化

第四次修信使一行は，後藤象二郎や福沢諭吉の斡旋で横浜正金銀行から朝鮮政府名義で17万円の借款を受けることができた。そのうち5万円を済物浦条約の賠償金の一部として支払い，残った12万円を修信使の滞在費用と朝鮮人留学生派遣費用に充てることとした。

1883年5月には徐載弼，申應熙，林殷明，金益昇ら19名が日本海軍の軍艦比叡に乗って来日した。同行した牛場卓造と松尾三代太郎の案内で5月12日に長崎に入港し，5月20日に東京に到着した[13]。7月には朴泳斌や朴準陽，朴泳祐，李奎完ら12名が客船名護屋丸に乗って来日[14]，その後も留学生の派遣が続いた。留学生の大半はまず慶應義塾へ派遣され，そこで日本語を学んだ。『慶應義塾五十年史』には次のように記されている。

金玉均氏の斡旋にて，数十名の生徒を送り来り，慶應義塾にては，之が監督をば飯田三治氏に托し，一同を現寄宿舎賄所近傍に在りし舊長屋に収容して，先づ日本語を教へ，日本語にて一と通り用を辨ずるに至るを待ち，之を或は陸軍省に依頼して，陸軍の学校に入れ，或は横濱の税関長に相談して，税関の事務を見習はしめ，或は逓信省に依頼して，郵便事務を稽古せしむるあれば，或は農学校に送りて，農学を修めしめたる者，前後殆ど六十名程に達せし[15]

留学生たちは慶應義塾で数か月間日本語を学んだ後，それぞれの専門分野へ進学した。1883年10月には徐戴弼ら14名が陸軍戸山学校へ進学した。外衙門から派遣された金益昇，申載永，安寧洙らは横浜税関で税務の研修を受けたと思われる[16]。また，金漢琦と安寧洙，金益昇の3名は慶應義塾の予科へ進学した[17]。李樹廷が1883年末に設立した朝鮮人教会に通う留学生もあらわれ，そのうち何名かは洗礼を受け，築地の東京一致英和学校に入学した[18]。

4. 東京一致英和学校への入学

当時の朝鮮ではキリスト教が禁止されており，特に大院君は1866年に天主教（カトリック）弾圧の教令を下し，フランス人宣教師9名と国内の信者8000名以上が虐殺される丙寅迫害が起きた。その後も大院君によるキリスト教徒迫害は続いたが，大院君が失脚し，1882年に朝米修好通商条約が結ばれたのにともない，信教の自由が形式的には認められたが，朝鮮国内でのキリスト教の布教は認められていなかった。ミッション・スクールである東京一致英和学校に朝鮮人が入学することには反対の意見もあったが，それを許可したのが金玉均であった。

ルーミスの回顧によると，慶應義塾で学んでいた留学生の中から2名

が洗礼を受けてキリスト者となり，彼らは慶應義塾を去って築地の東京一致英和学校に入学した。留学生の監督をしていた金玉均は大いに悩んだが，この二人の青年の高尚な性格と，その学業に対する真面目な態度を認め，入学を許可した。その後，ルーミスは金玉均を食事に招待し，マーティン（W. A. P. Martin）が中国語で著した『天道溯源』と，中国語聖書を金玉均に渡した。これらを読んでキリスト教への興味を深めた金玉均は，ルーミス，ノックス，マクレイらと交流するようになった。金玉均は宣教師たちの前で「私は2年か3年のうちに朝鮮のキリスト教布教の門戸を開いてみせる」と語ったという[19]。マクレイは1884年に朝鮮へ渡り高宗に謁見するが，その仲介をしたのは戸曹参判の金玉均であった。

こうして朝鮮人留学生の東京一致英和学校への入学が認められ，1883年には3名，1884年には4名が入学した[20]。1884年9月に東京英和予備校が神田に設立されると，留学生たちはそちらに移り，二階の寄宿舎で暮らし始めた[21]。

『時事新報』の記事には，「本邦滞在の朝鮮国留学生の中にて基督教の信者となりし者都合七名なりといふ[22]」とあり，東京一致英和学校に入学した学生たちの多くは受洗してキリスト者となっていたものと思われる。

5. 甲申政変と朝鮮人留学生

第四次修信使の役目を終えて帰国した朴泳孝は，1883年2月に漢城判尹（今日のソウル市長）に就任すると，巡警部を設置して新式警察制度を導入し，治道局を設置して道路整備事業を推進する一方，新聞の発行にも努めたが，閔氏政権によって1883年4月に広州留守兼守禦使に左遷されてしまった。朴泳孝は広州留庁舎のある南漢山城で，日本の陸

軍戸山学校で歩兵戦術を学んだ申福模を呼び寄せて日本式の訓練による新式軍隊の建設を進めた。しかし，兄の朴泳教が暗行御史の役を罷免されたことを機に，朴泳孝も1883年10月に広州留守の役を自ら辞任した。

1883年6月には閔泳翊が米国派遣修信大使として派遣されるが，開化派要員であった洪英植は副使，徐光範は従事官として同行した。洪英植は帰国後，近代的郵便制度の確立のために郵征局総弁に任じられた。

1883年8月に近代的印刷出版機関である博文局が創設され，10月には朝鮮で初めての近代的新聞『漢城旬報』が発刊された。官報の形式で月三回発行された『漢城旬報』には，金玉均の「治道略論」や「会社説」も掲載され，開化思想を広く浸透させた。

金玉均は1883年4月に東南諸島開拓使兼捕鯨使に任命された。捕鯨権を担保とした300万円の借款を交渉するため，1883年7月に訪日したが，交渉に失敗し1884年4月に帰国した。金玉均による日本での資金調達活動が頓挫したことにより，留学生派遣の継続が困難となり，陸軍戸山学校を卒業した朝鮮人留学生達の多くが帰国した。

閔氏一族を中心とした守旧派は，急進的な開化派を政界から遠ざけ始めた。朴泳孝が育てた新式軍隊は漢城に召喚され，閔氏政権派の韓圭稷の率いる親軍前衛・後衛に編入されてしまい，申福模も罷免された。軍事権を握った守旧派は，開化派にいっそう強い圧力を加え始めた。

1884年6月に清仏戦争が起こると，開化派たちは清からの独立をなす絶好の機会であると判断し，閔氏政権打倒のクーデターを企てはじめた。日本公使の竹添進一郎は開化派に接近し，後援を約束した。

甲申政変は1884年12月4日，郵征総局落成祝賀晩餐会の場で決行された。晩餐会では閔氏政権の要人である閔泳翊を負傷させ，高宗を景祐宮へと移し，日本軍に王宮を包囲させ，高宗への謁見を求める閔台鎬，閔泳穆，趙寧夏らを殺害した。翌日，開化派たちは李載元を左議政，洪英植を右議政とする新政権を樹立させ，14カ条の改革要綱を発表した。

しかし，ソウルに駐留していた約1500名の清軍が武力介入し，開化派の洪英植と朴泳教は大逆罪で処刑され，陸軍戸山学校出身の申福模，朴応学，白楽雲，尹泳観，李建英，李秉虎，鄭行徴，河応善らも殺害された。政変は失敗に終わり，金玉均と朴泳孝，徐光範，徐載弼らは仁川から千歳丸に乗って日本へ亡命した。

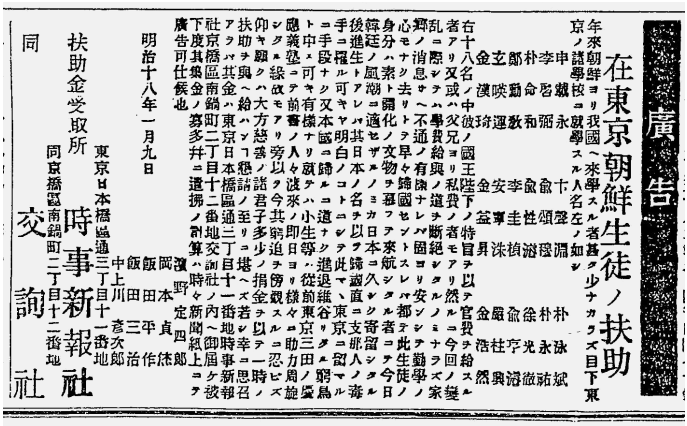
日本に渡った金玉均らは，銀座の三浦屋酒店や三田の福沢諭吉邸，浅草本願寺などを転々としたが，ルーミスの紹介で横浜居留地内の洋館を借りて隠れ住んだ。朴泳孝と徐光範と徐載弼の３名は，1885年５月に渡米した。金玉均は日本政府によって小笠原諸島や北海道などに幽閉された。李鴻章と面会するために上海に渡った金玉均は，1894年３月に刺客の洪鐘宇によって射殺された。

一方，甲申政変の失敗により学費が途絶えてしまった留学生たちの生活は困窮した。朝鮮政府の帰国命令に従って帰国した留学生もいたが，開化派とその家族が逮捕されているという情報も入り，帰国を拒んだ者もいた。朴泳孝の従兄である朴泳斌は『東京日日新聞』の記者に次のように心境を語っている。

> 各がたにも知し召さるゝ如く，己が一族凡は変乱に遭ひて非命の最後をとげ，今は父母もなき身となりて候へば，今ははや何を楽みに帰国を急ぎ候べき，只一両年も此ままに留学して，帰国の上は国に報ぜんこと責てもの願にて候へとて帰国せざる由なり(23)

1885年１月９日の『時事新報』には，「在東京朝鮮生徒ノ扶助」と題する広告が掲載された。

> 在東京朝鮮生徒ノ扶助
> 年来朝鮮ヨリ我国へ来学スル者甚ク少ナカラズ目下東京ノ諸学校ニ就学スル



廣告

在東京朝鮮生徒ノ扶助

年來朝鮮ヨリ我國ヘ來學スル者甚ク少ナカラズ目下東京ノ講學校ニ就學スル人名左ノ如シ

右十八名ノ中彼ノ国王陛下ノ特旨ヲ以テ官費ヲ給スル者アリ又或ハ父兄ヨリ私費ノ者モアリ然ルニ今回ノ変乱ニ際シテハ学費給与ノ道チ断絶シタルノミナラズ家郷ノ消息サヘ不通ノ有様ナレバ固ヨリ安ンジテ勤学ノ心モナク去リトテ早々帰国セントスレバ都テ此生徒ノ身分ハ素ト開化ノ文物ヲ慕フテ来航シタル者ニテ今日韓廷ノ風潮ニ適セザルノミカ日本ニ久シク寄留シタル後進生トアレバ其日本ノ名ヲ以テ帰国直ニ支那人ノ毒手ニ罹ル可キヤ明白ノコトニシテ此マヽ東京ニ留マルニ手段ナク又本国ニ帰ルニ道ナク進退維谷リタル窮鳥ト申ス可キ有様ナリ就テハ小生等ハ従前東京三田ノ慶應義塾ニテ前書ノ人々渡来ノ即日ヨリ様々ニ助力周旋シタル縁故モアリ旁以テ今其窮迫ヲ傍観

スルニ忍ビズ仰ギ願クハ大方慈善ノ諸君子多少ノ捐金ヲ以テ一時ノ扶助ヲ与ヘ給ハント懇請ノ至リニ堪ヘズ若シ幸ニ思召アラバ其金ハ東京日本橋区通三丁目十一番地時事新報社京橋区南鍋町二丁目十二番地交詢社ノ内へ御届ケ被下度其集金ノ寡多井ニ遺拂ノ計算ハ時々新聞紙上ニテ広告可仕候也[24]

この広告の呼びかけ人には留学生の世話係をしていた飯田三治に加え，慶応義塾塾長の濱野定四郎や時事新報社長の中上川彦次郎も名を連ねている。

この記事に挙げられた18名のうち，慶應義塾予科の金益昇と同人社の朴命和は，ルーミスの援助を得て東京英和予備校に入学し，洗礼を受けて一致教会に入会し，米国留学の準備を始めた[25]。また，申載永と厳柱興，金漢琦の３名は甲申政変前後に東京専門学校に入学している[26]。

1885年２月には甲申政変の事後処理のために外衙門協辨の徐相雨とドイツ人顧問のモレンドルフ（穆仁徳）らが第五次修信使として日本に派遣された。彼らも留学生たちに帰国を促したが，留学生の多くは帰国を拒み，第五次修信使と共に帰国したのは厳柱興と愈性濬の２名のみであった[27]。日本代理公使近藤眞鋤から督辨交渉通商事務の金允植宛ての1885年５月７日付外交文書には，「厳柱興・愈性濬二人願帰，朴裕宏許留外，十七人逃跪[28]」と報告されている。

1885年４月には紳士遊覧団での渡日経験のある安宗洙が日本に派遣され，留学生との接触を試みたが，食費などの滞納問題が未解決なこともあり，留学生を連れ帰ることは出来なかった。

金允植から日本臨時代理公使高平小五郎に宛てた1885年９月６日付外交文書「在日留学生朴裕宏以外召還の件」には，日本に残留している18名の留学生名簿（以下，「残留学生名簿」と略す）が添付されている。その18名は以下の通りである。

徐光徹・朴泳斌・鄭勲教・朴泳祐・愈亨濬・愈頌黙・玄暎運・卞聲淵・李啓弼・朴裕宏・金浩然・金漢琦・白喆庸・城春培・張澱奎・李宜皐・金華元・安駒壽[29]

1886年5月には外衙門主事の朴準禹が日本に派遣された。朴準禹は愈亨濬と愈頌穆，朴永祐，徐光轍，金漢琦，李樹廷の6名を伴って帰国した。統署日記（外衙門の職務日記）によると，この6名以外に「餘在四人，二往美國，二在後次船便出来云[30]」とあるので，日本に残留している者や渡米した者もいたようである。

帰国した留学生たちはその後，どのような人生を歩んだのだろうか。琴秉洞が国立国会図書館憲政資料室所蔵の『斉藤実文書』の中から発見した「明治十七年（甲申）以後政変干連人等名簿」（以下，「政変関連人名簿」と略す）には，留学生たちの帰国後の動静について，次のように記載されている（留学生の部分のみ抜粋）。

高永憲　日本留学生　明治十六年癸未日本派遣　甲申被囚多年　病死
李燦永　同留学生　　屢被囚　後為郡守　巡回管内死於洪水
金仁植　同留学生　　甲申被囚十年後放還　為郡守　死於暴徒
厳柱興　日本留学生　一時被囚即放還　為度支参書官　病死
金永燦　同留学生　　甲申十月被囚十年後放釈後　為鎮南浦府尹　合併後無職
鄭勲教　日本留学生　亡命日本　後還　為法部主事　現無職
趙秉教　同留学生　　一時被囚　即放釈　現咸鏡南道参与官
白喆鏞　同留学生　　甲申十月逃避　後為郡守　現無職
徐光轍　同留学生　　甲申十月拘囚　後被殺
朴泳斌　同上　　同上
徐載昌　日本留学生　甲申十月拘囚　後被殺
愈亨濬　同上　　同上

卞聲淵	同上	同上
李鳳弼	同上	同上
朴裕宏	同上	甲申十月自殺
申載永	同上	甲申被囚多年　後被竄于咸鏡北道洪原郡　後放還現洪原郡主
金浩然	同上	甲申十月拘囚　後被殺
愈斌兼	同上	一時拘囚　後放還　現郡守[31]

この資料によると，帰国後に開化派の一員として捕らえられ，処刑された留学生も少なくなかったことがわかる。1894年に朴泳孝らが赦免されて朝鮮に帰国し，1894年から1896年にかけて甲午改革・乙未改革とよばれる近代化改革がおこなわれるようになると，開化派の人々が再び登用されるようになった。では，東京一致英和学校・東京英和予備校に在籍していた留学生たちの動静について，現時点で判明している情報を次章で個別に整理してゆきたい。

6. 東京一致英和学校・東京英和予備校で学んだ朝鮮人留学生たち

(1) 朴泳祐（朴永祐）

1883年7月に李奎完，朴準陽らと共に名護屋丸に乗って渡日。慶應義塾で日本語を学んだ後，東京一致英和学校に入学した。甲申政変後，朝鮮政府の帰国命令を拒んで日本に留まったが，1886年5月に朴準禹に伴われて帰国した。帰国後数年間の動静は不明であるが，一緒に帰国した愈亨濬と徐光轍が逮捕・処刑され，金漢琦と李樹廷は行方不明となっていることから，朴泳祐も開化派の一員として逮捕されて流罪となっていた可能性がある。しかし，甲午改革・乙未改革で開化派勢力が復権す

ると，朴泳祐は1895年には大韓帝国軍の正尉となり，軍務国の外国課員に任命された[32]。1896年7月に開化派系官僚を中心に独立協会が結成されるが，同協会の補助金納入者名簿の中にも朴泳祐の名が記載されている[33]。

(2) 卞聲淵

1861年生まれ。本貫は密陽。1882年に倭学（日本語）の通訳官試験に合格した[34]。1883年に渡日し，慶應義塾で日本語を学び，東京一致英和学校に入学した。甲申政変直後の『自由新聞』には卞聲淵と高永憲について，次のように報道されている。

> 朴（ママ）聲淵と高永憲　二氏は予て我邦に留学中の處本國より呼戻しに依り過日帰国の途に就き既に長崎に到着したりしが今回本國の変乱で容易に鑑定に至らざるの模様あるを以て一先づ東京に立戻ると決し一昨日の便船にて帰京したりと聞く[35]

記事中の「朴聲淵」は，卞聲淵のことだと思われる。卞聲淵と高永憲は長崎からの帰国を取りやめ，東京へ戻った。1885年9月6日付の「残留学生名簿」にも卞聲淵の名前が記載されている。帰国した日時については不明であるが，「政変関連人名簿」には，卞聲淵が帰国後に捕らえられて殺害されたと記録されている。韓国併合直前の1910年7月，卞聲淵は金珏均（金玉均の弟）や朴泳斌（朴泳孝の従兄），徐光轍，愈亨濬らとともに正三品に追叙された[36]。次頁の資料は官報の記事である。

(3) 高永憲

1862年生まれ。本貫は済州。1880年に倭学（日本語）の通訳官試験に合格した[37]。1883年に渡日し，慶應義塾で日本語を学び，東京一致英和

官報（日刊）第四七四〇號　明治四年七月二十五日（第三種郵便物認可）

故六品丁在寛　同金炳塾　同河元泓　同嚴杜鳳　同趙宅顯　同張浩翼　同權善鎭　同金弘均

特贈正三品

故進士金玉齊　故學生朴齊璜　同吳鑑　同卞聲淵　同俞亨濬　同朴泳斌　同徐光轍　同金然九　同張台浩　同吳聖模　同李鎔益　同金聖雲　同曹命學　同李秉

特贈六品（以上七月十八日宮內府）

宮內府主事　李相奎

依願免本官（七月二十日宮內府）

郡主事　林泰若

命醴泉郡在勤（七月十九日內部）

土地調査局技手　勢榮三

給四級俸

土地調査局技手　藤野篤藏

給四級俸

学校に入学した。

甲申政変直後に卞聲淵と共に帰国しようとするが断念して長崎から東京に戻った（注35の記事参照）が，その後の新聞記事や「残留学生名簿」等に高永憲の名前が見当たらないため，1885年の早い時期に帰国したようである。帰国後は釜山港で翻訳官をつとめていたが，1886年には元山港書記官に転勤となっている[38]。森万佑子の外衙門主事に関する研究によると，高永憲は1886年5月26日から5月28日まで外衙門の主事となるが，在任日数は3日と少なく，出勤した記録はない[39]。「政変関連人名簿」には「甲申被囚多年」とあるので，1886年以降は流罪となっていた可能性もある。

甲午改革・乙未改革で開化派勢力が復権すると，高永憲は1895年に内部参書官となり，1896年に法部法律起草委員，1897年に内部視察官[40]，1900年に中枢院議官，1903年には慶基殿参奉となった[41]。没年は不明であるが，「政変関連人名簿」には「病死」と記載されている。

(4) 朴準陽

朴準陽は親日政治家･朴斉純[42]の従弟である[43]。1883年7月に名護屋丸に乗って渡日。慶應義塾で学んだ後，東京一致英和学校に入学した。甲申政変後の新聞記事や「残留学生名簿」等に朴準陽の氏名が掲載されていないことから，政変以前に帰国した可能性もある。

朴準陽は大院君派の官僚として，1886年には内務府副主事となり，1894年には内務部主事から内務副承旨，さらに内務参議に昇格した。1894年6月に政治・軍事に関する一切の実務を統括する軍国機務処が創設されると，朴準陽も議員に任命された[44]。朝鮮公使大鳥圭介は陸奥宗光外務大臣に宛てた機密文書の中で「李泰容・朴準陽・李源競ノ三人大院ニ最モ昵近」と報告している[45]。

しかし，1894年8月に大院君の孫の李埈鎔が清軍と内通して王位を簒奪しようとした陰謀事件が発覚すると，内務参議の朴準陽と議政府都憲の李泰容がその参謀として逮捕された。一度は流刑罪が宣告されたが，大院君がこれに抗議して撤回させた。しかし1894年10月に法務協辯の金鶴羽が暗殺される事件が起きると，その首謀者として大院君派の朴準陽らが再び逮捕・投獄された。朴準陽と李泰容は1895年5月13日に特別法院で絞首刑を宣告され，死刑が執行された。李埈鎔にも死刑が求刑されたが，内閣総理大臣の金弘集が死刑に反対したため，李埈鎔は死一等を免ぜられて配流となった[46]。特別法院の裁判長は開化派の徐光範であった。

(5) 李啓弼

1860年生まれ。本貫は咸平。1883年に渡日。慶應義塾で学んでいたが，李樹廷が開設した朝鮮安息日学校に通って信仰を持つようになり，洗礼を受けて東京一致教会信徒となり，築地の東京一致英和学校に入学した。1884年に神田の一致英和予備校に移り，宣教師の支援を受けな

がら米国留学の準備をすすめていた[47]。甲申政変後も日本に留まり，一時は帰国する意思を表明していたが[48]，1885年の秋に渡米した。1887年にペンシルバニア州のリンカーン大学に入学した。

1888年1月，李啓弼はワシントンに開設された駐米朝鮮公使館を訪問し，朴定陽公使と面会した。朴定陽は従宦日記に次のように記している。

> 李啓弼来見　本以江原道鐵原人　来遊我京　癸未夏　到日本　遊学数年　乙酉秋　轉到美國　幸頼美人之救恤　托跡於片瑟邊依阿州加雲他郷大学校　頗通英語云[49]

朴定陽に英語力を評価された李啓弼は，大学の長期休暇中に公使館業務を手伝うようになり，1888年9月にはコロンビア大学（現ジョージ・ワシントン大学）に転入学し，公使館から学費等の援助を受けながら，駐米朝鮮公使館の非常勤職員として勤務した。

1891年5月にコロンビア大学を卒業し，アメリカ合衆国の大学を卒業した最初の朝鮮人留学生となった。卒業後も公使館に勤め，米国造幣局で造幣過程の調査もおこなった[50]。

1891年の冬に帰国し，1892年1月に内務府の副主事となった[51]。1893年6月15日からは外衙門主事をつとめている。外衙門は1894年7月に外務衙門へと改編され，さらに1895年3月に外部と改称されたが，李啓弼は外部主事をはじめ，咸鏡道慶源興地方商務委員や雲山郡守，内務主事などもつとめた[52]。

1896年からは漢城府少尹として都市開発計画を推進し，その後も度支部の税務視察官，弘文館副校理，弘文館侍讀，外部参書官，秘書院丞などを歴任した[53]。

1896年7月に徐載弼ら開化派系官僚を中心に独立協会が創立される

と，李啓弼は独立協会の幹事員に選出された[54]。独立協会は独立門を建設するための募金運動や『独立新聞』の創刊，独立館を会場とした討論会の開催などをおこなったが，李啓弼は討論会の代表討論会員や提議者をつとめた。

(6) 朴命和

幼名は氏者。1882年に第四次修信使の朴泳孝一行とともに渡日した。「使和記略」によると，来日時の朴命和は数え年で12歳の少年であった[55]。朴泳孝は朴命和を日本国内の英語学校へ留学させたいので斡旋してほしいと井上馨外務卿に相談したところ，まずは慶應義塾へ入学することになった[56]。1882年12月12日から慶應義塾で日本語を学び始めたが，1883年1月に同人社へ転入学した[57]。同人社に転入学するための中村正直（敬宇）との交渉は尹致昊と金玉均がおこなっており，尹致昊日記には次のように記されている。

> 復伴往中村敬宇家，志那人張紫昉来坐，禮畢，古友丈托以朴童（命和）入学事，敬宇稱諾，約以陽本月十日入校，飲酒閑談後帰寓[58]

「古友丈」は金玉均のことである。尹致昊はその後，外務省や福沢諭吉に朴命和の同人社への転入学が決まったことを報告し，入学手続きや学費の支払いなども代行している[59]。1884年に甲申政変が起き，生活費に困るようになると，朴命和はルーミス宣教師の財政的支援を受けた。その経緯について，『朝野新聞』は次のように報道している。

> 朝鮮留学生　横浜聖書会社の長米人ルミス氏は朝鮮留学生の困難なるを深く憐み殊に少年なる金益昇，朴命和の二人を引取り救助して築地の某学校に入学せしめしと金益昇は初め慶應義塾にあり朴命和は同人社にありし者にて何

れも品行正しく才智も優れたれば是迄日本人にも深く愛せられし者なりとぞ(60)

記事中の「築地の某学校」は東京一致英和学校と思われるが，実際に入学したのは神田の東京英和予備校だったようである。『基督教新聞』には次のように紹介されている。

神田淡路町の英和予備学校に在る韓客金益昇，朴命和の両氏は日曜学校其他聖教の講義等あるときは必らず欠席さるることなく当時は洗礼を受けて一致教会に入会し居らるる由なるが右両氏は来る六月下旬頃同じく一致教会信徒李景弼(ママ)氏と共に米国ニュー，ヨークに留学の為め渡航せらるる筈なりと云ふ(61)

記事中の日曜学校は，李樹廷が東京YMCAに開設した朝鮮安息日学校だと思われる。統署日記には「二往美國」(注30参照）と記されているが，金益昇は渡米せずに帰国しているので，朴命和が李啓弼と共に1885年秋に渡米した可能性がある。しかし，1885年9月6日付の残留学生名簿に李啓弼はあるが朴命和の名前は記されていない。1885年5月に朴泳孝・徐光範・徐戴弼が渡米しているので，朴命和がそれに同行して，李啓弼より一足早く渡米したのかもしれない。

また，朴命和が1885年9月6日以前に政府の命令に従って帰国し殺害されたという可能性もある。宮地謙吉は東京英和予備校で出会った朝鮮人留学生について，次のように回想している。

朝鮮事件に逃げて来た朝鮮有志家李桂(ママ)弼君の他二三人の同志が二階の寄宿舎に居ました日を経るにつれ私も段々友人も出来休暇時間等に寄宿舎に出入する事もありました其の内に李某と云ふ最少年の鮮人と親くなりました六月の

末でした氏は先輩李桂弼君等の勧戒を退けて当時朝鮮政府から今帰鮮せば国事犯の大罪を許すとの通知を堅く信じ近日決意帰鮮すとて退校したのでした。私は彼が近き内に祖父母に遭へるとて非常に喜んで私に別れを告げた事が今尚記憶に鮮かであります。而して氏等幾十人を載せた船が釜山に到着するや否や皆捕はれて殺されたと云ふ事を其秋築地の一致英和学校で聞た時は轉た悲惨の情に耐へなかつたのでした。(62)

この追憶文にある「李某」が誰を指すのか，特定できていないのであるが，「最年少」とあるので，朴命和である可能性も考えられる。朴命和が渡米したのか，それとも帰国して殺害されたのか，消息は不明である。

(7) 金益昇

1848年生まれ。本貫は慶州。1883年5月に徐戴弼，申載永，安寧洙らと共に牛場卓造に伴われ軍艦比叡に乗って渡日。慶應義塾で日本語を学びながら，横浜税関などで研修を受けていたものと思われる。

1884年10月7日に慶應義塾の予科に入社した(63)が，甲申政変で学費が断絶し困窮したため，ルーミスの援助を得て東京英和予備校に転学した。李樹廷が開設した朝鮮安息日学校にも通い，洗礼を受け，米国への留学も計画していたようだが，政府の帰国命令に従い帰国した。帰国時期は不明であるが，1885年9月6日付の残留学生名簿に記載がないので，それ以前に帰国したと思われる。1885年7月に安寧洙と申載永が帰国している(64)ので，この時に一緒に帰国した可能性がある。金益昇と安寧洙と申載永の3名は，1885年8月から外衙門の主事となり，金益昇は仁川，申載永は釜山，安寧洙は元山の海関管理署へ派遣された。外衙門の外交文書には，「本衙門申載永・安寧洙・金益昇三名嘗往日本，学習税務而回，此行派送三口幇辯税務司之事(65)」と記されており，日本

で税務を学んだ経験が朝鮮の税関で生かされたようである。

金益昇は三港口，仁川海関管理署書記官，仁川港書記官などをつとめ，1886年10月から再び外衙門の主事となった[66]。1894年から開化派勢力による甲午改革・乙未改革がはじまると，金益昇は軍務衙門参議，元山港監理，德源郡守，元山港知事，議政府参書官，中枢院議官，秘書院丞などを歴任し，1904年には外部交渉局長となった[67]。

おわりに

朝鮮の開化政策により，1883年から1884年にかけて約60名の朝鮮人留学生が日本に派遣された。その中には李樹廷や宣教師たちのキリスト教伝道によって導かれて洗礼を受け，ミッション・スクールである東京一致英和学校・東京英和予備校で学んだ留学生が，少なくとも7名いたことが判明している。この7名のうち，5名は甲申政変前後の1884年から1886年の間に朝鮮に帰国した。帰国後，卞聲淵は開化派の一員として捕らえられ，処刑された。朴泳祐・高永憲・朴準陽・金益昇の4名は官僚として様々な働きをした。李啓弼は米国の大学に進学し，大学卒業後に帰国して官僚となった。朴命和も渡米した可能性があるが，その後の消息は不明である。

金玉均の仲介でマクレイが高宗と面会したことは第4章で触れたが，高宗はキリスト教宣教の許可は与えなかったものの，医療と教育事業を行う許可を与えた。それを受けて米国公使館付の医師として朝鮮に入国したのが医療宣教師のアレン（H. N. Allen）だった。アレンは1884年12月4日に起きた甲申政変で重傷を負った閔泳翊を治療した功績により，王室の侍医に任命され，1885年に朝鮮最初の近代的病院である廣恵院が高宗によって開設されると，アレンは廣恵院の医師兼最高責任者となった。廣恵院は間もなく済衆院と改称されたが，この済衆院の

教師として朝鮮に渡ったのが北長老教会の宣教師アンダーウッド（H. G. Underwood）であった。

アンダーウッドとメソジスト監理教会の宣教師アペンゼラー（H. G. Appenzeller）は，1884年12月にサンフランシスコを出発し，横浜に上陸したが，甲申政変にともなう朝鮮の政情不安からしばらく日本に滞在することとなった。彼らは1885年3月5日にマクレイ宅で宣教師会議を開き，朝鮮宣教に関して協議をおこなった。この宣教師会議に同席して朝鮮伝道の助言をしたのが，東京外国語学校朝鮮語教師の李樹廷と，甲申政変で日本亡命中の朴泳孝であった[68]。アンダーウッドとアペンゼラーは日本で約2か月間，李樹廷や朴泳孝や留学生たちから朝鮮語を学び，李樹廷が翻訳した聖書を携えて1885年4月に朝鮮に渡った。アメリカ人宣教師たちが朝鮮に入国する前に，日本で朝鮮の開化派たちと接触して情報を集め，交流を深めていたことは，朝鮮でのプロテスタント伝道に大きな影響を与えたと言えるだろう。

日本における最初の朝鮮人プロテスタント信者となり，聖書翻訳や朝鮮人留学生たちへの伝道活動を熱心におこなっていた李樹廷の帰国後の動向についてはよくわかっていない。殉教説や棄教説，病死説などもあるのだが，今後の研究課題である。

一方，1885年5月に横浜を出航し，米国に渡った朴泳孝は，1886年に日本に戻り，ルーミスやマクレイ，ワイコフ（M. N. Wyckoff）ら宣教師たちと密接に関わりながら亡命生活を続け，明治学院の予科にも入学して英語を学んだ。朴泳孝とキリスト教（特に明治学院）との関わりについては，稿を改めて検証したい。

注

（1）『明治学院百年史』明治学院，1977年，112頁。なおこの名簿中の朴聲淵は，正しくは卞聲淵である。

（2）注（60）と（61）の記事を参照

（3）『明治学院百五十年史　主題編』明治学院，2014年，243頁

（4）『明治学院五十年史』明治学院，1927年，157～158頁

（5）黄遵憲『朝鮮策略』建国大学校出版部，1977年

（6）姜在彦『朝鮮の開化思想』岩波書店，1980年，194～202頁

（7）『郵便報知新聞』1881年6月13日

（8）『七一雑報』第6巻第47号，1881年11月25日。徐正敏「李樹廷と日本キリスト教との関係」明治学院大学教養教育センター紀要カルチュール第10号，2016年，2頁より再引用

（9）琴秉洞『金玉均と日本』緑蔭書房，1991年，66頁

（10）琴秉洞，前掲書，97頁

（11）朴泳孝「使和記略」，民族文化推進会編『海行摠戴』古典国訳叢書第88巻，1978年，景仁文化社，1978年，140頁

（12）『七一雑報』第8巻第19号，1883年5月11日。徐正敏，前掲書，3～4頁

（13）『時事新報』1883年5月14日，5月21日。李光麟『朝鮮開化史の諸問題』1886年，一潮閣，53頁。

（14）『時事新報』1883年7月6日。政春敦史「明治16年・朝鮮人留学生の慶應義塾派遣について」慶應義塾大学塾生サイト（https://www.students.keio.ac.jp/hy/law/class/registration/files/a1399945920245.pdf）より閲覧，6頁

（15）『慶應義塾五十年史』慶應義塾，1907年，588～599頁

（16）第6章（7）金益昇の項を参照

（17）西村直子・王賢鍾「明治期慶應義塾への朝鮮留学生（一）」『近代日本研究』第31巻，慶應義塾福澤研究センター，2015年，272～258頁

（18）『東京毎週新報』1884年4月11日

（19）佐波亘『植村正久と其の時代』第4巻，教文館，1966年，259～260頁

（20）『東京毎週新報』1884年3月7日。『明治学院百年史資料集』第2集，1975年，4頁より再引用

（21）『明治学院五十年史』155～158頁

（22）『時事新報』1885年1月8日

(23)　『東京日日新聞』1885年1月22日
(24)　『時事新報』1885年1月9日。政春敦史，前掲書，22～23頁
(25)　第6章（6）朴命和と（7）金益昇の項参照
(26)　檜皮瑞樹「一八八四年の東京専門学校朝鮮人留学生に関する研究ノート」『早稲田大学史記要』第46号，2015年，37～52頁
(27)　『時事新報』1885年3月25日。政春敦史，前掲書，24頁
(28)　亜細亜問題研究所旧韓国外交文書編纂委員会編『旧韓国外交文書』第1巻，文書番号454，高麗大学校出版部，1965年，225頁。李光麟，前掲書，57頁
(29)　『旧韓国外交文書』第1巻，文書番号539「在日留学生朴裕宏以外召還の件」，258頁。李光麟，前掲書，56頁
(30)　「統署日記」高宗23年丙戌4月23日，亜細亜問題研究所旧韓国外交文書編纂委員会編『旧韓国外交関係附属文書』第3巻，高麗大學校出版部，1972年，377頁
(31)　琴秉洞，前掲書，924～930頁
(32)　「承政院日記」1895年5月26日，国史編纂委員会の承政院日記データベース（https://sjw.history.go.kr/）より閲覧
(33)　『大朝鮮独立協会会報』第3号，1896年12月
(34)　『譯科榜目』，国立中央図書館の古典籍データベース（https://www.nl.go.kr/korcis/）より閲覧，일산古6024-98，294頁
(35)　『自由新聞』1884年12月25日。李光麟，前掲書，56頁
(36)　「承政院日記」1910年6月12日。内閣法制局官報課『官報』第4740号（1910年7月26日）。
(37)　「譯科榜目」290頁，国立中央図書館古典籍データベースより閲覧，일산古6024-98
(38)　「承政院日記」1886年5月23日
(39)　森万佑子『朝鮮外交の近代』名古屋大学出版会，2017年，106～107頁
(40)　大韓帝国『官報』第139号（1895年8月16日），第237号（1896年2月1日），第838号（1898年1月5日）
(41)　「承政院日記」1900年2月14日，1903年4月13日
(42)　朴斉純は吏曹参議・参判・漢城府尹などをつとめた後，外部大臣として第二次日韓協約と日韓併合条約に調印したため，朝鮮では親日派の「乙巳五賊」「庚戌国賊」と呼ばれている。

(43)　『大阪毎日新聞』1894年11月21日
(44)　「承政院日記」1886年8月20日，1894年6月22日，1894年6月25日
(45)　『駐韓日本公使館記録』第5巻，機密第188号本111（1894年9月21日），国史編纂委員会の韓国史データベース（https://db.history.go.kr/）より閲覧
(46)　李瑄根『民族の閃光』時事通信社，1967年，228～229頁，285～286頁。「承政院日記」1895年4月19日
(47)　『基督教新聞』85号，1885年4月8日。『明治学院百年史資料集』第2集，1975年，13頁より再引用
(48)　『旧韓国外交文書』第1巻，文書番号532「在日留学生措處に関する件」，258頁
(49)　朴定陽「従宦日記」1888年1月31日，韓国学文献研究所編『朴定陽全集』第2巻，亜細亜文化社，1984年，651頁。韓哲昊「最初の米国大学卒業生李啓弼の日本・米国留学と活動」『東国史学』第37号，2003年，368頁
(50)　韓哲昊，前掲書，376頁
(51)　「承政院日記」1891年12月11日
(52)　森万佑子，前掲書，196～197頁
(53)　「承政院日記」1895年9月6日，1900年10月4日，1901年12月7日，1902年5月1日
(54)　「大朝鮮独立協会会報」創刊号，1896年11月30日
(55)　朴泳孝，前掲書，121頁
(56)　朴泳孝，前掲書，120～121頁，140頁
(57)　李光麟，前掲書，52頁
(58)　尹致昊「尹致昊日記」1883年1月3日，『尹致昊日記1』韓國史料叢書第19巻，國史編纂委員會，1973年，2頁
(59)　「尹致昊日記」1883年1月5日，1月15日
(60)　『朝野新聞』1885年1月15日。李光麟，前掲書，56頁
(61)　『基督教新聞』85号，1885年4月8日
(62)　『明治学院五十年史』157～158頁
(63)　西村直子・王賢鍾，前掲著，272頁，287頁，288頁
(64)　「統署日記」高宗22年乙酉6月10日，前掲書，233頁
(65)　『旧韓国外交関係附属文書』第2巻，文書番号1「日本で税務を学習した申載永等三人任用の件」（1885年11月7日），1頁

(66)　森万佑子，前掲書，p106～107頁

(67)　「承政院日記」1894年8月21日，1895年1月11日，1895年7月5日，1895年11月24日，1899年2月13日，1899年3月11日，1899年10月4日，1904年2月2日

(68)　金泰勲『近代日韓教育史研究序説』雄山閣出版，1996年，36頁